

新岡垣風土記

第460回

町の県指定文化財の紹介③

―龍昌寺(高倉)の「紙本著色黒田如水像」と

「紙本著色井上周防像」―

岡垣歴史文化研究会 入江 東樹

黒田如水と井上周防は1600年前後の頃の人物なので、その頃の時代を簡単に紹介する。

豊臣秀吉が天正20(1592)年から、朝鮮への出兵を進めた。その途中で、秀吉は死去した。

秀吉の死後、後継者争いが慶長5(1600)年、徳川家康方の東軍と石田三成方の西軍の2軍による「関ヶ原の戦い」となった。東軍が、西軍を制した。

この頃、筑前国を支配していた小早川秀秋は前記の戦いで家康方を支援し、それが評価されて加増され、備前国(岡山)に移った。

この後、筑前国には、豊前国(大分)を領していた黒田長政と父の孝高(如水とも呼ばれた)が移ってきた。それは前記の戦いで、家康方の勝利に貢献したことが評価されたからである。



▲龍昌寺の「紙本著色黒田如水像」(「図録 岡垣の文化財I」から援用)



▲龍昌寺の「紙本著色井上周防像」(「図録 岡垣の文化財I」から援用)

黒田家は、播磨国(兵庫)出身だった。井上周防は、その頃から黒田父子に仕えていた。筑前国の家臣団は、黒田一門と共に、播磨以来の家臣もいた。周防は播磨以来の黒田の功臣だったので、「黒田二十五騎」(重臣)の一人となった。周防は黒崎城を築き、現在の八幡・遠賀一円を領地にした。周防は、吉木の隆守院(寺)の横

に別荘を建てた。姉は吉木の代官、三輪家に嫁いだ。周防は信心深く、禅門に入っていたといわれ、それまで衰微していた高倉の龍昌寺と周辺の風景も気に入ったようで、ここを菩提寺と定め、元和3(1617)年、龍昌寺を再興した。周防は隠居後に道柏と称し、寛永11(1634)年に没して、龍昌寺に葬られた。本堂の裏に、墓がある。町指定文化財になっている。

〔紙本著色黒田如水像〕
如水は前記のように、黒田孝高(長政の父)のことである。周防は播磨時代から、孝高を慕っていたという。画像は白い頭巾を被り、栗色の「十徳」(外出用の服装)を着た如水の姿が描かれている。縦約1m、横約50cmの掛軸である。画像の上部には、慶長10(1605)年、前大徳春屋宗園が、「如水禅人肖像」の「賛」(画面で人物等を称賛する言葉)を記している。春屋は、大徳寺(京都)の名僧だったという。

この画像を、周防が如水を追慕して寄進したという。

〔紙本著色井上周防像〕
晩年の周防が白い頭巾を被り、黒い「十徳」を着た姿で描かれている。像は縦約1m、横約40cmの掛軸である。画像の上部に、龍昌寺八世の金峰玄錫の「賛」があり、寛永11(1634)年の日付になっている。そしてこの像は、「雪溪道柏居士肖像」と書かれている。周防の諱(死後の称号)は、「庭樹院殿雪溪道柏居士」だった。この2つの肖像画が、昭和35(1960)年、共に県指定文化財に指定された。前記の「賛」のことで、小川賢さんにお世話になった。県指定文化財の紹介は、本号で終了です。

●「岡垣町史」
●「福岡県の歴史」(山川出版社)

【お詫びと訂正】 ※広報おかがき 12月号に掲載している「新岡垣風土記」に記載していた海蔵寺の木造馬頭観音坐像の御開帳の日に誤りがありました。訂正してお詫びします。